



趣味を通じた生きがいづくり

十人十色

今回から始まるこのコーナーでは、個性的な趣味をもった方をご紹介します。

垣下 嘉徳さん

神奈川県立相模原青陵高校教諭

【かきた・よしのり】昭和27年生まれ。昭和51年大学卒業後、神奈川県立高校へ国語科教諭として赴任。著書『路上の芸術』（ホビージャパン刊）は2015年に復刻版が出版された。テレビ、ラジオへの出演多数。



スロバキアの首都・ブラチスラバにて

Vol.1

マンホール蓋探索

マンホール蓋のファーストは蓋の上から平和を叫ぶ

——垣下さんは、趣味でマンホール蓋を探索されているようですが、きっかけは何だったのですか。

今から20年ほど前、旅で訪れた大阪府太子町をトボトボ歩いている時、文字の書かれたマンホール蓋に気づいたことに始まります。絵があることも初めてでしたが、文字それも「十七条の憲法」が書いてある。聖徳太子を汚水と並べて「太子 汚水」とは、とんでもないことや！ 文字が書かれたものを踏むことに対する抵抗感もあって、私は驚きを通り越して怒り心頭でしたが、帰路につく頃にはすっかり忘れていました。

その1年後、昔話の研究で岡山市を訪れた際、桃太郎づくしの市内で、ふと「マンホール蓋も桃太郎かい？」と周辺を探すと、3匹の家来を従えて鬼が島を望む桃太郎が描かれたマンホール蓋を見つけました。そこで太子町のことを思い出し、「絵は自治体によって違うのかな。金太郎を売り出している南足柄市は、蓋もそうかな」と疑問を抱きさっそく探しに行くと、「熊にまたがりお馬の稽古」の絵柄です。自治体によって絵が違うということがわかり、私が住む神奈川県内のマンホール蓋を撮影し始めました。

——マンホール蓋を探索する面白さ、魅力とは何ですか。

絵柄に込められた各自治体のメッセージを読み解くことです。絵柄から、まちの歴史・文化・産業などを読み取り、さらに調べて知的好奇心を満足させます。マンホール蓋の絵柄は分類することで、図鑑が作れます。似たモチーフもありますが、それぞれの自治体の工夫を比べるのも楽しい。テーマをもって追いかけると面白くなります。

——マンホール蓋の探索について、ご家族の反応は？

一言で変人。写真を引き伸ばして、きれいだろうと妻に声をかけても、「でもマンホールなのでしょう？」。いいものはいいだろうと言っても、下水道は汚いというイメージで固まっていたので、どうにも受け入れてもらえませんでした。

——マンホール蓋に関してどんな活動をされていますか。

古いマンホール蓋は「路上の文化遺産」であり、その価値を説いて保存を求めたり、魅力を伝える講座を開いたりしています。さらに、授業としても展開しています。

——垣下さんにとって、マンホール蓋の探索とは何ですか。

自分らしさの証明、他人と違うことをしたいという、自己主張の場です。ファーストの「昆虫」に匹敵するものだと思います。マンホール蓋の観賞は平和であること、社会が安定していることが前提です。見入っているところに鉄砲玉が飛んできたらシャレになりませんからね。

——この趣味を始められて何が変わりましたか。

写真撮影のため、情報交換のため、催し物に参加するため等々、とにかく出歩くことが増えました。マンホール蓋1枚からまちの歴史やら何やらを調べるために猛烈に本を読んだりしていると、時間が足りない気がしてなりません。

——今後、どのように関わっていきたいですか。

何度もマンホール蓋の探索からの卒業を考えましたが、若い人たちとの交流の中で、やめたり休んだりする訳にはいかないと感じています。まだ誰も手をつけていない分野を切り拓いていく使命もありますし、まだまだ、マンホール蓋を開けて穴の中に落ちる訳にはいかないですね。

太子町



神津島村



渋谷区道玄坂



撮影時のこだわりは「絵柄がはっきり見えるよう蓋の真上から真円を目指すこと」「汚れや砂は極力除くこと」「雨に濡れていれば極力雑巾で拭く、傘の位置を考えるなど、その時々で工夫すること」

白川郷にて。初めて訪問するところでは必ずマンホール蓋を探し、写真に撮る

